にぎわいのあるまちを目指して　特集

よみがえれ！中心市街地商店街

商店街は、たくさんの小売業やサービス業などのお店が集まって街区をつくり、地域に買物する場やコミュニティの場を提供しながら成り立っています。商店街のそれぞれのお店が力を合わせて活性化を図り、魅力ある商店街へと変貌していくことは、まち全体の魅力を高め、地域経済の発展や、市民生活を豊かにすることにつながります。

本市にも16の商店街があって、さまざまなかたちで市民の生活に貢献しています。各商店街は、市民の皆さんの最も身近な買物場所であるとともに、人と人とのふれあいの中で生きた情報に接触できる、いわばコミュニティの中心として、重要な役割を担っています。

今回は、市内の商店街の中から、中心市街地に位置し、その活性化に向けて取り組んでいる商店街を紹介します。

市の中心市街地は、彦根城を中心とした城下町が形成されて以来、人口や商業などの都市機能が集中し、まさに市の「顔」としてさまざまな活動の中心的な役割を果たしてきました。

最近では、人口の流出や高齢化、購買力の低下などにより、活力の低下という事態に直面しています。こうした中心市街地の衰退・空洞化は、全国的な傾向であり、その対策を講じるため、平成10年7月には、国により「(通称)中心市街地活性化法」が施行されました。

市でも、こうした動きにいち早く対応して、同11年1月に「彦根市中心市街地活性化基本計画」を策定し、市街地の整備改善や商業などの活性化に係る施策の一体的な推進に努めてきました。魅力的な中心市街地をつくることで、街の中での回遊性を高め、多くの人が行き交うにぎわいのあるまちを目指しています。

また、彦根商工会議所をTMOに認定して、連携・協力を図りながら、中心市街地の活力再生に向けた取り組みを進めています。

問い合わせ先　市商工課☎(22)1411番内線329番、FAX(22)1398番、E-mail: shoko@ma.city.hikone.shiga.jp

市場街、世紀の大改造！

彦根市場商店街協同組合　中村繁司さん

今、市場街の半分をつくり変えています。アーケードを撤去して新しい道を作り、区画整理の手法で住み慣れた場所を譲り合い、さらに景観協定をより高いレベルにとTMOファサード整備事業も同時に導入して、まとまりのある商店街を創り出す百年の大計です。愛称を、公募で「四番町スクエア」と決めました。

この事業をきっかけに、業種を換えた店、名前をおしゃれに変えた店、ちょっと変わった明るい店が次々と完成していきます。そして何よりもうれしいことに、今まで努力しても成果の得られなかった空き店舗にも、次々と新しいテナントが開店しています。また、区域の中に、集客の核となるような施設をつくろうと取り組んでおり、彦根で一番の街に生まれ変わるものと期待しています。

夢京橋とはつながりました。次は銀座街や中央街とつながる、残り半分のエリアの整備です。これができないと彦根の中心商店街の連鎖、回遊性が生きません。

このまちが百年先も親しまれ、人の集まる場所であり続けることを願い、住む人に潤いを、来る人には感動を提供できるまちを目指して、精一杯努力を重ねていきます。

工事の進む「四番町スクエア」

用語解説

TMO＝「タウンマネージメント機関」の略で、中心市街地活性化に主体的に取り組む機関

ファサード整備事業＝通りに面した建物正面部分を整備して、外観を美しく統一する事業

新たなまちづくりの第一歩として

おいでやす商店街振興組合　植田修二さん

おいでやす商店街の新しいキャラクター「彦助」

平成14年、彦根市をはじめ国や滋賀県の支援もあり「ファサード整備事業」に取り組むことができました。店舗や住居35軒のたたずまいが大きく変わり、通りそのものが明るく生まれ変わりました。日本建築の『美・優・快』を生かして「白壁・格子戸・のれん」を取り入れ、店舗には木製看板を取り付けました。「おいでやす商店街らしさ」を追究する、絶好の機会となりました。

また、商店街の先人たちの商人の魂を受け継ぎ、再生と飛躍を夢見て、商店街に新たなキャラクターが誕生しました。「あきんどのまち彦助通り」というキャッチフレーズのもと、遊び心と思いやりのある新しいキャラクター「彦助」です。まずはその姿が陶板で表現され、家屋の玄関先などで皆さんをお出迎えします。優しい表情にホッと一息、癒されること請け合いです。

これから、我が商店街の顔として、第一線で活躍してくれることでしょう。皆さんから末永く愛されることを願っています。

この事業を「地域商店街のあるべき姿を見直し、会員それぞれが意識を変えるきっかけ」ととらえ、城下町彦根の商店街らしい個性が表現できる空間づくりを目指していきます。長い商店街活動の歴史のなかの新たな時代の幕開けにしたいと期待をふくらませています。

ファサード整備を終えたおいでやす商店街のまち並み

紙上談話室10

"売る"商店街から、"コミュニティセンター"としての商店街へ

彦根市長　中島一

新しい生活指向が支配的になるにしたがい、商店（小売業者）にもそれに対応する新しい業態が生まれ、新しい生活文化を支える産業が盛んになってきました。女性の社会進出が活発になり、共働きが一般化すると、コンビニエンスストアが急速に展開され、外食産業が盛んになるという風にです。

かつての「消費者」が、今日では「生活者」と呼ばれるようになりました。しかし、呼び名が変わっても、人の本質まで変わるわけではありません。ただ、人の生活態度や生活方法は、その時代の文明や文化によって左右されますので、そのため商店の形態も、その時代の生活文化を色濃く反映した独特の形態のものとなるのです。

商店の皆さん方は、生活者のライフ・スタイルに対応し、新しい業態を形成しておられます。

ところで、商店の集合体が商店街を創り、いま、"売る"商店街からコミュニティセンターとしての商店街へと変貌を遂げなければなりません。

私は、その目ざすものとして、次のことが重要であると考えています。

1. "まち"としての自覚をもった商店街
2. 情報機能を有する商店街
3. "憩いの場"としての商店街
4. ティーチング・サービス機能を持った商店街
5. 生活センターとしての商店街
6. 地域ニーズに合致した商店街

すでに、この考えをもとに、中心市街地の活性化に向かって努力をいただいている商店街は数多くあります。

しかしながら、中心市街地では、近年、高齢化や人口の流出にあわせ、商業購買力の低下などによる市街地の空洞化と衰退などが全国的傾向で進んでいます。今こそ、本市としましては、中心市街地における「市街地の整備改善」や商業地の活性化に向け、施策の一体的推進に努め、中心性の創出とともに、"まち"中への回遊性を高め、彦根ならではの賑わいのある"まち"創りを、市民の皆さんと知恵と工夫を重ね協力しながらさらに進めていきたいと考えています。皆さん方のさらなるご協力をお願いいたします。

多くの人で賑わう
「花しょうぶ祭り　勝負市」

銀座通りでお客さんを
迎えるモニュメント

「あきんど」の原点に立ち返る

彦根銀座街商業協同組合　杉本剛郎さん

銀座商店街は、昭和36年に防災建築、平成12年にアーケード改修やコミュニティ道路の竣工など、時代に先駆けて実施してきました。

現在は、市内の商店街で最多の65店ががんばっていますが、郊外型の大型ショッピングセンターやロードサイド型の商業施設の出現や、消費者の変化によって厳しい状況に立たされています。空き店舗の増加、駐車場や後継者の不足などが、長引く不況とあいまって私たちにとって大きな逆風となっています。

そんな中で、私たちは、あきんどの原点・精神に立ち返り、お客さまとの対話やふれあいを大切にしていきたいと考えています。そうした日々の地道な努力が、今の時代は求められているのではないでしょうか。

この春には、銀座あきんどまつりを開催して、各店それぞれが趣向を凝らした、専門店ならではのサービスを提供することにしています。銀座街再生に向けて力を合わせ、魅力ある商店街づくりに努力していきます。

専門技術、教えます

登り町グリーン通り商店街振興組合　中村泰始さん

私たちの地域は、幟旗を管理する役目の武家の居住地域に隣接するために江戸時代には「のぼりまち」と呼ばれるようになっていたようです。その名称が現在まで引き継がれているわけです。

平成11年に商店街振興組合を設立して以来、「環境」をテーマに活動を続けています。ヨーロッパ風に外観を整備したファサード整備事業、発光ダイオードによるイルミネーションなどのハード事業に加えて、ゑびす講・土曜夜市のほか、通りを花で飾ったり、鮭まつりなどの継続的なソフト事業も各方面のご支援をいただきながら積極的に展開しております。「店先カルチャー教室」は、「それぞれのお店が持っている専門技術を教えてもらえる場が欲しい」という声に応えて昨年から開催しています。「寄せ植え教室」や「黒豆煮方教室」などすでに10回開催し、好評をいただいています。

今後もいろいろと新しい企画を検討して、お客さまが親しみを持って、来てくださる商店街を目指します。

「寄せ植え教室」のようす

ノスタルジックなまち・夢京橋

彦根夢京橋商店街振興組合　水野義博さん

まち並み整備事業完成から4年がたち、観光商業型商店街として、まち全体の景観の美しさと個々の店舗の魅力で、訪れる人に満足や楽しさ、喜びを感じてもらおうとがんばっています。まちづくりのコンセプトは「OLD・NEW　TOWN」。古い歴史や伝統の中の新しい文化、古さを生かした新しい息吹、古さと新しさの融合、などを意味します。

今後のいちばんの問題は、市立病院の跡地利用や、四番町スクエアの区画整理事業を、夢京橋の商店街づくりにどう生かしていくかです。彦根の観光をさらに力強いものにし、年間100万人の観光客を迎えるまちを実現するためには、中核のあるまちづくりを進め、それぞれの商店街の役割を認識し、イベントなどのソフト事業の改革に取り組まなければなりません。

夢京橋は、城からまちへの回遊をつなぐ重要な位置にあります。歴史や伝統を持った商店街ががんばらなければ、彦根のまちはよくならないという思いで、皆さんとともに知恵を出し行動していきたいと考えております。

7月に開催される夢京橋のイベント「彦根ゆかたまつり」

ダ・ビンチのように挑戦を

花しょうぶ通り商店街振興組合　中溝雅士さん

花しょうぶ通り商店街は、古くから多賀、伊勢街道に続く通りで、また、江戸期からは仏具、表具、和ろうそくなどの職人が多く暮らした、庶民的でにぎやかな下町らしい文化と歴史を持つ商店街です。

活性化計画は平成8年4月の名称変更（旧名は上恵比寿商店街）からはじまり、組織改革、法人格取得などを経て、下町文化の復興と創造に向けて自らのアイデンティティを生かしながら、古くても新しい心を持つやさしい街づくり「ふるあたらしい街　花しょうぶ通り」をテーマにした活性化事業を自らの意思と感性により、手作りで一歩ずつ今日まで重ねてまいりました。

年越しの「カウントダウン」、夏の「人力紙飛行機コンテスト」をはじめ、4月から12月の月に1回、夕方から開催する「ナイトバザール」など、さまざまな事業が回を重ねながらようやく認知され始めました。

6月上旬の『花しょうぶ祭り　勝負市』は内外の多彩な工芸作家と多くの来街者を迎えるために、地域住民の皆さんが1年間にわたり約2千株の色彩豊かな花しょうぶを育て、また当日の運営は県立大の学生たちのボランティアサポートにより進められています。

花しょうぶ通りには、レオナルド・ダ・ビンチによる人力飛行機のオブジェが設置されています。ダ・ビンチが人の力だけで大空へ挑戦したように、私たちも常に挑戦していきます。

学識者の声

400年の歴史を生かして

滋賀大学経済学部助教授（財政学）只友景士さん

中心市街地の空洞化は、世界の先進国の都市に共通する課題です。その背景には、都市工業が衰退し、工場が都市の中心から離れていったことがあります。彦根市でも同様の現象が起こっていて、その結果、中心市街地の人口が、昭和50年代の約70%になっているという数字もあります。これだけ減ると、商店街の経営にも大きな影響があるでしょう。

そのため、空き店舗対策だけでなく、古い民家を改修して利用するなど、空き家や空き地を活用して、人口を増やす対策も大切です。中心市街地は、社会資本も整備され、生活上の資源（お店や公的施設）へのアクセスが容易で住みやすいはずなので、適切な対策で人は戻ってくるのではないでしょうか。

いずれにせよ、最後は商店街各店の「売る力」にかかってきます。ファサード整備などのハード事業は、あくまで補助に過ぎません。

彦根の中心市街地は400年の歴史のあるまちです。たくさんの人たちがそこに歴史を刻み、その分だけ人の思いが詰まったまちなので、それを生かすことでほかにない商店街ができるのではないでしょうか。

消費者の声

思いがけない発見が楽しみです

畑野千恵子さん（原町）

買い物が好きで、観光などの目的で遠出をしても、つい行き先にある商店街やスーパーマーケットに足が向きます。

ふだんの買い物は、1週間に1、2回、まとめ買いですませます。生鮮食料品は、鮮度が良くて、農薬などの心配のない安心して食べられるものを選んで買っています。そうしたものが安く売っているなら、遠くのスーパーマーケットでも出かけます。駐車場が広ければ、私のように自動車の運転に自信がなくても、気軽に行けるのもありがたいですね。

市内の商店街へは、自転車で出かけます。3㎞ほどの道のりですが、ふだんから自転車に乗っているせいか、近いと感じます。あるお店が売っている、地場産のおいしい野菜が目当てです。他のお店にない商品をこだわって売っているお店なのです。

時間があれば、商店街をぶらぶら歩いてみたいです。意外なお店で、思いもしない発見をするのが楽しみです。